

## 田山先生の私生活

白石実三

私と田山先生との関係は私の少年時代からですから随分古く長いものであります。私は親しく近より過ぎる位に言わば父とも思つて懐かしんだのですが、先生もまた私を子として愛しもし憎みもされたもので、その間には形式とか義理とかいうものは微塵もなく、生活も感情も肉体的に混じり合ったような間柄でありました。私の為に媒酌もしてくれましたし、また間接に就職の事も心配してくれました。けれども私は直接物質的にはお世話にならず、また原稿推薦という事にもお世話になろうとしなかった、先生はこれを非常に喜ばれて、お互いに独立してやつて行くからしてこうした深い長い交際が出来るのだ、と始終言つて居られました。

友情に厚い人でしたが、良い意味の人の噂では故独歩、柳田、島崎の諸氏の事や、古くは小栗風葉氏、尾崎紅葉氏などもよく話題に上つたものです。そして先生は口癖のようによい友を持ちたいと言われた。自然主義が勃興したのも一面から言えば独歩氏なり藤村先生なり乃至風葉、泡鳴など、諸氏との厚い友情がグループをなして行つた事にもよるでしょう、子供に対しても理解ある深い愛をそそがれて居ました。またもと会津武士の流れを汲んでいただけに義理堅い人で日本の国家主義などを支持され

て居ました。

壮年時代までは酒も飲まれましたが、またなかなかの食道楽で、昔の江戸の□類、団子、□煎餅、駄菓子の種類や川魚料理なども好きで、可成りの食通でもありました。

社交が嫌いでその交際範囲は文壇人ばかりで、一意文学に精進して居られたもので、為に家庭的には電気や瓦斯がすの知識も殆どなかったようです。

記憶力や観察力の優れて居られた事は実に驚くべきもので、常に事物を細かくハッキリと見て行こうとされた。地理や歴史に興味を持たれたから旅行が好きで、よく紀行文を書かれたが、自分の歩いた土地の事はどんなに古くても覚えて居られた。大町桂月氏なども『田山君のものを読むと自分の足跡が実にハッキリと再現して来る』と言つて感心されたものです。

何と言つても故人の生涯を支配したのは恋愛問題でありました。先生は恋愛などに ついても一切の形式や習慣を破つて、露骨に芸術上にも日常生活にも正直にこれを発表して行かれた。青年時代の女性に対する純真な憧憬を失わず、中年の恋となつて所謂『蒲団』事件を起こされた。自分が悩まされただけに島村氏や有島氏などの死に対して新聞記事の裏を考えて深い同情を惜しまれなかった。こうして先生は「性」問題、家庭問題に色々と求めたり、失望したり、悩んだり、嘆いたりして六十年の一生を終わられたのです。『しかし自分は満足だ、長い間には色々な事をし尽くしたからね』と

臨終一週間前に私に言われました。

晩年は支那歴史を研究して居られたようです。曾ては桂園一派の歌人でしたが後漢詩に転ぜられ、最近は今々漢詩を以て文壇時評をして居られた。兎に角最後に至るまでも、この文壇腐敗の時に当たって態度を乱さず、純文学に精進せられた事は真に尊敬に値する事であります。

尚先生の遺作が文壇諸氏のお力をかりて世に出るようになれば遺族共々に非常に嬉しい事であります。(Y記)

※本文の表記は、できるかぎり常用漢字・新かな遣いに改めた。補訂を加えた箇所もある。判読不能な箇所は□で表した。

※出典 「文藝時報」第136号(昭和5年5月22日)